

## 今週の為替相場見通し(2018年3月26日)

| 総括表      |      | 注 | 先週の値動き          |        | 今週の予想レンジ        |
|----------|------|---|-----------------|--------|-----------------|
|          |      |   | レンジ             | 終値     |                 |
| 米ドル      | (円)  |   | 104.64 ~ 106.64 | 104.75 | 103.00 ~ 106.00 |
| ユーロ      | (ドル) |   | 1.2240 ~ 1.2388 | 1.2352 | 1.2200 ~ 1.2400 |
| (1ユーロ=)  | (円)  |   | 128.96 ~ 131.73 | 129.45 | 127.00 ~ 131.00 |
| 英ポンド     | (ドル) |   | 1.3913 ~ 1.4220 | 1.4133 | 1.4050 ~ 1.4250 |
| (1英ポンド=) | (円)  | * | 147.05 ~ 150.31 | 148.02 | 147.00 ~ 149.50 |
| 豪ドル      | (ドル) |   | 0.7672 ~ 0.7793 | 0.7695 | 0.7600 ~ 0.7800 |
| (1豪ドル=)  | (円)  | * | 80.50 ~ 82.58   | 80.62  | 79.00 ~ 82.50   |

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

### 1. 米ドル

為替営業第二チーム 鶴田 涼平

(1)今週の予想レンジ: 103.00 ~ 106.00 円

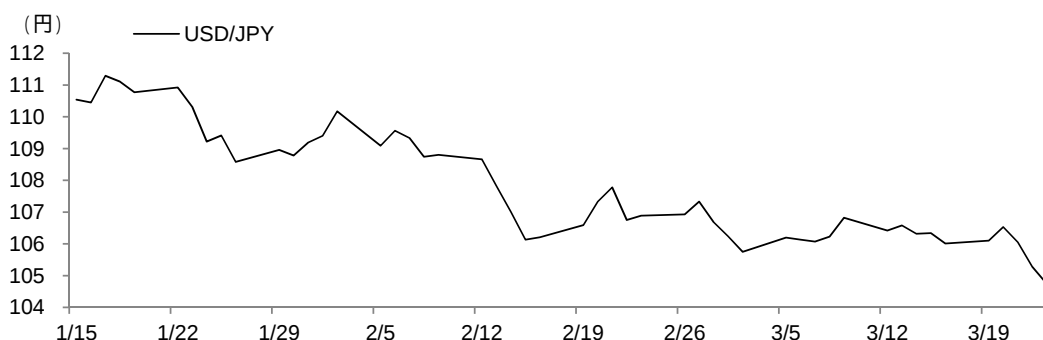
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は大きく値を下げる展開。週初19日に106円近辺でオープンしたドル/円は、内閣支持率が急落との報道が嫌気され105円台後半まで下落。その後、クロス円の上昇にドル/円も106円台前半まで連れ高となるも、米株の大幅下落を背景に105円台後半まで反落。20日、中国の李首相が輸入関税の一部撤廃と大幅な関税引き下げを目指すことを好感され106円台半ばまで上昇。21日、FOMC後に公表されたメンバーの政策金利見通し(ドット・チャート)で年内の利上げ見込み回数が3回に維持されると、利上げペースの加速が一部で期待されていたこともあり、ドル/円は失望感から一時106円ちょうど近辺まで急落。その後、パウエルFRB議長による遅すぎる利上げは経済にリスクをもたらすとの発言を背景に一時週高値となる106.64円まで急反発するも、インフレに対する見方が予想比ハト派であったことなどが材料視され105円台後半まで反落した。22日、トランプ米大統領が中国に対する貿易制裁発動を命ずる文書に署名と報じられると米中貿易摩擦激化への懸念から105円台前半まで下落。23日にかけてもリスク回避姿勢が強まる中でドル/円は下値を切り下げる展開が続く、年初来安値となる104.64円まで続落となった。その後も上値の重い展開が続く中、結局104円台後半で越週した。

今週のドル/円相場は上値の重い展開を予想する。先週行われたFOMCでは予想通り利上げが決定された。経済見通しやインフレ見通しが上方修正され、ドット・チャートにおけるドットも全体的に上方修正されたものの、焦点となっていた年内利上げ回数の中央値が前回値から据え置きとなり、一部で期待された程のタカ派会合とはならなかった様子。足許で上値の重い推移が続くドル/円相場のレンジの中心を押し上げる材料となることを個人的には期待していたが、不発に終わってしまった模様だ。かかる状況下、鉄鋼・アルミニウム関税に始まったトランプ政権の一方的な貿易政策は、中国に対する最大600億ドル規模の関税措置の実施にまで拡大しており、米中貿易摩擦の激化に対する警戒感が高まっている。中国側は対抗措置としてあらゆる選択肢を排除しない考えを示しており、同国の保有する米国債も交渉カードの一つに挙げる可能性も否定していない。本邦では引き続き森友学園問題が尾を引いており、リスクセンチメントを冷やす材料ばかりが目につく状況にむしろドル買い材料を見つける方が困難な印象を受ける。米経済指標やFRB高官の発言に一時的にドル/円が上昇する場面は見られるかもしれないが、リスク回避姿勢が支配的となる中で基本的には上値の重い展開が続くと予想する。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/19~3/23)の値動き: 安値 104.64 円 高値 106.64 円 終値 104.75 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

為替営業第二チーム 橋 雄史

(1) 今週の予想レンジ: 1.2200 ~ 1.2400 127.00 ~ 131.00 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週のユーロ/ドル相場は上下に大きく振れるもレンジ内で推移した。週初19日に1.22台後半でオープンしたユーロ/ドルは1.22台半ばまで下落したものの、ブレグジットに向けた協議の進展に関する報道を受け1.23近辺まで上昇。さらに「今年末に量的緩和を終了し、来年半ばに利上げを見込む市場の予測はECBとしても違和感がない」との報道に1.23台半ばまで続伸。20日は独3月ZEW景気期待指数が予想を大きく下回り、FOMC結果発表を控えたドル買戻しの流れも相俟って一時週安値となる1.2240をつけた。21日は同水準で上値重く推移するが、FOMC結果を受けてドル売りが優勢となる中、1.23台半ばまで上昇。22日は一時週高値となる1.2388をつけたが、米中貿易摩擦への懸念が強まりユーロ/円が下落すると1.22台後半まで連れ安となった。23日は中国が米国の貿易関税に対抗する措置を発表するなど、一段と貿易戦争懸念が高まり、相対的にドル売り優勢の中で1.23台半ばにて越週した。一方、対円では週を通じて軟調推移。週初19日は130円台半ばでオープン。EUと英国がブレグジット移行期の条件で合意とのヘッドラインを受けポンド/円が上昇する中、ユーロ/円は131円台まで上昇した。20日はFOMCを前にドル買戻しの動きが強まる中でドル/円が底堅く推移すると、ユーロ/円は週高値131.73円まで上昇した。21日はFOMC結果を受けてドル売りが強まる動きに加え、コモディティ価格の上昇から資源国通貨が上昇する展開となると、ユーロ/ドルも堅調に推移し、ユーロ/円は130.20円まで大きく下落した。22日は米中貿易摩擦懸念からリスクオフムードが強まり、米株が大きく下落する展開にクロス円も軟調推移し、129.50円まで続落。23日は東京時間朝方にドル円が105円をブレイクし年初来安値を更新する展開にユーロ/円も週安値128.96円をつけた。引けにかけてはユーロ/ドルが買戻され、結局129円台半ばで越週した。

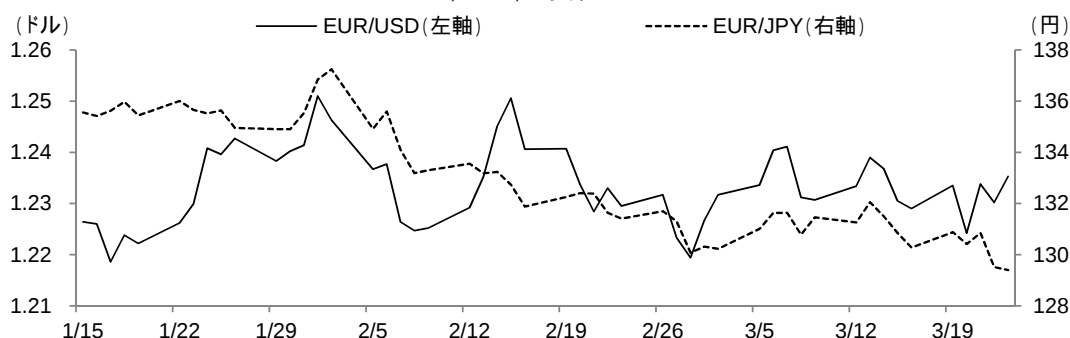
今週のユーロ相場はイースター休暇を控え、方向感に乏しい展開を予想する。先週はFOMC結果発表に加え、米中貿易摩擦懸念が大きく高まり、ドル売り優勢の地合いが強まった。FOMCで発表されたドットチャートでは2018年度の利上げを4回と見る参加者が増えたものの、これまで通りの3回利上げシナリオが維持され、米国の減税政策に伴う経済成長期待から2019年度以降の緩やかな利上げシナリオが示される格好となった。またパウエル議長会見では、トランプ氏の通商政策や足元の貿易関税措置については、金融政策へ考慮していないとの発言もあり、貿易戦争が一段とヒートアップし、実体経済のセンチメント悪化が見られ始めた場合には、今後のFOMC会合にて利上げトーンが一段低下することも予想されよう。中期的にはドル売りが優勢となる中、ユーロ相場に上昇バイアスがかかることも考えられるが、先週以降の相場環境ではユーロ相場は脇役に徹しており、FOMC後の値動きも既往レンジ範囲内に留まった。加えて、今週はイースター休暇を迎えることもあり、動意に乏しい展開が予想される。ユーロ/円については、リスクセンチメントの後退からドル円が軟調推移していることに加え、今週は年度末を前にした本邦実需勢の円買い需要から一段の下押し圧力が強まる展開も予想され、ユーロ/ドルの流動性が乏しい中で、年度末に年初来安値を更新する展開には注意しておきたい。

## (3) 先週までの相場の推移

先週(3/19~3/23)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2240 高値 1.2388 終値 1.2352

(対円) 安値 128.96 高値 131.73 終値 129.45



(資料) ブルームバーク

## 3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.4050 ~ 1.4250 147.00 ~ 149.50 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の英ポンド相場は、緩やかな堅調推移。ただし、対円では、週末に掛け水準を切り下げた。週明け19日、ポンドは一段水準を切り上げ。同日に英のEU離脱の際の移行期間設定に関して合意が成立したことを好感した値動きだった。20日発表された英2月CPIは前年比+2.7%と市場予想(同+2.8%)を若干下回り、英中銀による早期利上げ期待を後退させることで若干のポンド売りを誘ったが、その影響は長続きしなかった。翌21日に発表された英11~1月平均賃金が前年比+2.8%と市場予想(同+2.6%)を上回ったことに加え、22日の英中銀金融政策委員会では2票の利上げ(+25bp)が投じられたからだ。利上げ票に対する意外感からポンドは一時急騰したが、程なく反落。23日には、英中銀金融政策委員会のブリハ委員(22日に利上げ票を投じたのはソーンダース委員とマカフェティ委員で、ブリハ委員は据え置き票を投じていた)が、向こう数か月の間に利上げを支持する可能性を示唆したが、ポンドの反応は鈍く、対円を除いてはせいぜい高止まりと言える水準で週の取引を終えた。週引けに掛けて進んだ対円でのポンド安は円独歩高の結果。22日にトランプ大統領が、中国に対する知的財産侵害関税に署名したことで、「貿易戦争」の本格化に対する警戒感が高まり、世界的な株安、「リスク回避」の円買いなどが進行した。

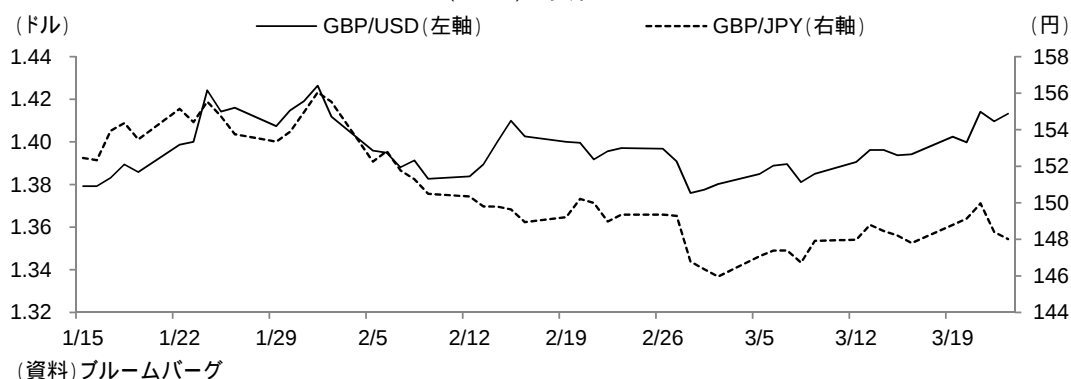
今週の英ポンド相場は、上値の重い膠着を予想。英市場は今週末を挟んで4連休(復活祭休日)で、市場参加者数や動意の低下が予想される。英のEU離脱交渉に関しては、先週、移行期間の設定に合意(19日)、EU側が将来協定(離脱後の英とEUとの新たな関係を規定する)の交渉方針のガイドラインを採択する(23日)など、相応の進展を見せた。この間のポンド堅調の重要な背景と考えられようが、これだけでポンドが、例えば対ドルの直近高値(1月25日につけた1.4346)を上抜けて、更に水準を切り上げていくとは考え難い。合意と言っても、「アイルランド/北アイルランド間に物理的な国境を設けない」「できるかぎり障害のない自由貿易協定を結ぶ」などの目標(希望)を羅列し、とにかく交渉を前に進める旨合意しただけで、その具体的な方法論に関してはほとんど踏み込まれていないからだ。英中銀の金融政策動向に関しては、足元、5月利上げの可能性の織り込みが進みつつある模様。確かに、現状、大幅なマイナスにある実質金利を大上段に議論するのであれば、英中銀がいつ利上げに踏み切っても不思議ではない状況にはある。しかし、そうした状況はここにきて突然示現した状況ではなく、過去何四半期も定着した環境。その背景には、英のEU離脱を巡る不透明感(英経済に与える打撃に関する)があり、国民投票から2年弱、離脱宣言(リスボン条約50条発動)から1年を経てもほとんど変わりはない。5月までの間には、英中銀金融政策を巡る思惑にも、まだ二転三転する余地はあるのではないかと。英経済指標では、29日(木)の英2月住宅ローン承認件数、英10~12月期GDP確報値などの発表が予定されるが、市場の関心が高いとは言えないだろう。

## (3) 先週までの相場の推移

先週(3/19~3/23)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3913 高値 1.4220 終値 1.4133

(対円) 安値 147.05 高値 150.31 終値 148.02



## 4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部シドニー支店 山口 美紀

(1) 今週の予想レンジ: 0.7600 ~ 0.7800 79.00 ~ 82.50 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の豪ドル相場は、一時年初来安値0.7672を付けた。19日、豪ドルは0.77前半でオープン。前週の株安を受けたリスクオフの動きから、豪ドルは0.76台に下落。20日、今月分の豪州準備銀行(RBA)議事録が発表されるも、真新しい内容に欠け、豪ドルの動きは限定的だった。また、米FOMCを控えて、ドル買いが優勢となり、豪ドルは0.76台で上値重く推移した。21日、FOMCを前に、豪ドルは一時年初来安値0.7672まで下落。しかし、FOMCでは予想通り+25bpの利上げは実施されるも、FOMCメンバーの政策金利見通し(ドット・チャート)で年内の利上げ見込み回数が3回に維持されると、利上げペース加速を見込んでいた投資家がドル売りに動き、豪ドルは一気に0.77後半に急反発した。22日、豪2月雇用統計前に一時週高値となる0.7793をつけるも、雇用者数変化や失業率が共に市場予想を下回る結果となり、豪ドルは0.77半ばに下落。海外市場では、トランプ米大統領が中国に対する貿易制裁発動を命ずる文書に署名と報じられると、米中貿易摩擦激化への懸念から、米株が下落した。リスクオフの動きから、リスク通貨豪ドルは0.76台に再び下落。23日、前日の株安の流れが継続し、リスク回避選好の動きから、安全通貨の円が上昇する一方で、リスク通貨の豪ドルは0.77を挟んで揉み合い推移となった。結局0.7695で取引を終えた。先週の豪ドル/円は2016年11月以来の安値水準である80.50円まで下落した。19日、豪ドル/円は81円後半でオープン。20日、中国の李首相が輸入関税の一部撤廃と大幅な関税引き下げを目指すと表明したことが好感され、ドル円が上昇する動きに、豪ドル/円も一時82円台に浮上。21日、市場予想よりハト派(金融引き締め消極派)のFOMC結果を受けた豪ドル急騰に押され、豪ドル/円も週高値82.58円まで上昇した。しかし、22日、予想を下回る豪2月雇用統計を背景とした豪ドル売りや、株安を受けた安全通貨の円買いから、豪ドル/円は81円前半まで急落。22日も、円独歩高の動きが加速し、豪ドル/円は2016年11月以来となる80.50円を付けた。結局、80.62円で取引を終えた。

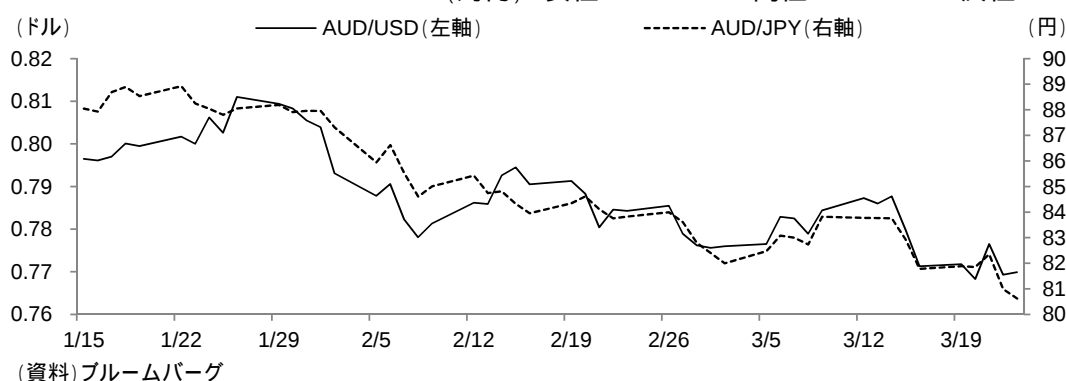
今週の豪ドルは引き続き上値重い展開を予想する。米国の保護主義を巡る各国の動きや政治動向に、世界の株価が敏感に反応する展開が続くと見る。貿易摩擦激化懸念が強く、リスクオフ継続から、豪ドルも下押し圧力がかかりやすい。また、先週開催されたFOMCでは、2019年以降政策金利見通しが引き上げられるも、米債利回りの上昇は限定的で、むしろリスクオフの動きに押され、前週比低下している。米債利回り上昇の可能性も低いことから、ドル買い(豪ドル売り)も出にくく、豪ドルの下値は0.76近辺と予想する。テクニカル的には、2016年、2017年安値を繋いだラインをサポートラインと考えている。このサポートラインが丁度0.76に位置する。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(3/19~3/23)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7672 高値 0.7793 終値 0.7695

(対円) 安値 80.50 高値 82.58 終値 80.62



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。